

「時枝誠記の言語理論における〈志向性〉の問題」

東京大学大学院学際情報学環博士課程

アロツ＝ラファエル アイングル

(Aingeru Aroz-Rafael)

はじめに

時枝誠記（1900-1967）の言語学は近代国語学のいわゆる四大文法の一つとして知られている¹。時枝が 1930 年代後半の緒論文、そして名著『国語学原論』（1941、以降『原論』）によって打ち立てた「言語過程説」は、当時から戦後数十年にわたって、国語学界の内外で多くの人の関心を集めると同時に、近代日本言語学ではもっとも議論を引き起こした言語理論だったと言える。

本論は、時枝の言語理論研究においておよそ 50 年前からしばしば指摘されながらもいまだ厳密で、包括的な考察の対象となっていない一つの問題、すなわち時枝の言語理論におけるエトムント・フッサール（Edmund Husserl, 1859–1938 年）の哲学の影響を取り上げる。フッサールと時枝の理論の間の関係についての研究は広範囲の考察を必要とするが、ここではそのための手掛かりとして、フッサールの現象学の根本的な概念である「志向性」が言語過程説の中にいかに変形されたかを課題としたい。そのために、主に時枝においてフッサールの思想がもっとも強く現れる時期、つまり言語過程説の旗揚げである「心的過程としての言語本質観」（1937）より『原論』（1941）に至るまでの時期の緒著作を取り上げて議論する。

1. 時枝誠記におけるフッサールの影響——何が知られているか。

時枝の言語理論がフッサールの哲学と何らかの関係があることは、さまざまな分野から指摘されたが²、その関係を初めて精密な調査の対象としたのは根

¹ その他の三つの文法は、山田孝雄（1873-1958）・松下大三郎（1878-1935）・橋本進吉（1882-1945）の文法である。

² 言語学界の外部の有名な著者の指摘の例として、例えば吉本隆明（1965:80-85）、柄谷行人（Karatani 1995: 21）等が挙げることができる。

来（1983）である。根来は時枝の著作の中で現象学への直接的な言及があり、それを検討することによって、時枝が現象学に近接したのが、フッサールを読むことによりでなく、1929年刊行の山内得立著『現象学叙説』（以降『叙説』）を通じてであったことを明かにした。

山内得立^{やまうちとくりゅう}（1890-1982）はフライブルクでフッサールの下で哲学を勉強し（高橋 1931:105）、当時京都帝国大学に教授として勤めていた哲学者であった。時枝は山内の『序説』を論文「言語に於ける場面の制約について」（1938a）の3カ所（7-8頁）で、そして『原論』の1カ所（331頁）³で引用している。他方、晩年の時枝自身は現象学を『叙説』をもって勉強したことを語り、言語過程説の根本の一つである詞・辞という品詞の分類基準自体がフッサールの「ノエシス・ノエマ」概念から由来していると打ち明けている（時枝 1968a, 23; 1968b, 70-71）⁴。

2. 先行研究と本論の立場

根来（1983）に次いで、時枝とフッサールの関係を直接に取り扱った研究は、野村（1991）、揚妻（2000）、安田（2000）、川崎（2001）、今井（2002）⁵、吉田（2011）がある⁶。本論では紙幅の都合から先行研究についての精密な検討を行うことができないため、彼らの立場を概観し、次に彼らの限界を指摘しておくに留める。先行研究を本論で主に以下の二つの立場に大別する。

① 〈解釈派〉根来は時枝の言語理論がフッサールから単に一つのヒントを受けつつも、根本的に近世国学の理論に基づいているという結論に辿り着く⁷。また、今井は時枝の言語理論において「詞・辞」という概念の重要性とその「ノエシス・ノエマ」との系譜関係を注視し、「詞・辞」概念の裏にある「現象学的」思想が言語過程説に潜んでおり、それを貫いていると主張する。

³ この『原論』の331頁の引用は根来を含めて、先行研究で指摘されていないでは、時枝の言語理論とフッサールの言語哲学の間の関係を理解する上で非常に重要な点である。本論のテーマから離れているので、別の機会にゆずる。

⁴ 時枝の現象学についての関心とその伝記的な詳細について、高木を参照。

⁵ 今井（2002）の論文は、Larm（2008）で知ったが、未刊行であったため、Lars Larm氏のご好意により手に入れることができた。

⁶ 釘貫亨「時枝誠記「過程説」と有坂秀世「音韻論」をつなぐ現象学の系譜」（2010『日本語学最前線』和泉書院、701-715）もあるが、それらの「系譜」が具体的に考察されないため、先行研究に入れないことにする。

⁷ 藤井貞和が時枝とフッサールの間での理論的關係についての考察を行うと言えないが、その關係について言及するとき同様な主張をしている（藤井 2000:137）。

② 〈批判派〉野村・妻揚・安田・川崎・吉田は、フッサールの「ノエシス・ノエマ」という概念についての時枝による誤解に注目を払っている。その上、妻揚・安田・川崎・吉田は言語過程説が言語における「聞き手」の立場に関する消極さを指し示し、時枝の理論を後期フッサールの「間主観性」(Intersubjectivität)と比較している。

これらの先行研究について指摘しなければならないのは、①と②両方に、きわめて重要なことが欠如している点である——つまり、時枝が現象学を『叙説』を通して学んだことが言及されるにもかかわらず、時枝とフッサールとの媒体となった山内の著作についての考察が行われていない。それに対して本論は、山内の『叙説』を通じたフッサールの現象学が言語過程説の形成に大きく関与したとする立場である。

筆者は、②の研究に強調されているように、言語過程説とフッサールの現象学がきわめて異質だと考える。時枝は言語、そして特に日本語という個別の言語を研究するための理論の構築を目指すのに対し、フッサールの現象学は意識の本質と観念的構造の記述を志す哲学である。また、言語についての立場に限定しても、両者の姿勢が大きく異なるのは当然である。時枝は言語についての経験的・目的論的な視点に立つのに対し、(とりわけ『論理学研究』の)フッサールは文法・意味論の形式的構造を凝視し、言語における使用・意図などを問題としていない。とはいえ、それにもかかわらず初期時枝と山内の『叙説』をともに読む時に、言語過程説の理論でのフッサールの哲学の影響の範囲が大きいと認めざるをえない。

時枝におけるフッサールの理論的背景がいかなる役割を果たしているかを理解する上で、まず山内の『叙説』を、そして次に『叙説』が重視する⁸フッサールの『論理学研究』(1902)を検討の出発点とする必要がある。そうして初めて、『論理学研究』においてフッサールが提起する言語に関する主要な課題を、時枝がことごとく山内を媒体として考慮し、言語過程説の成立に深く関与していることを見出すことができる。本論の筆者は、従来このことが十分に理解されなかったゆえに、時枝の言語理論の性質、その限界、その新たな展開

⁸ 山内は、『叙説』の「序」でフッサールの現象学の中でもっともなじみのあるものとして『論理学研究』を挙げている。ただし、彼の『論理学研究』の解釈には明かに問題がある。また『純粹現象学及び現象学的哲学の理念』(『イデー』)を『論理学研究』的に読み取る傾向がある。ちなみにそれがもっとも著しい個所の一つは、まさしく「ノエシス・ノエマ」の記述である。詳しくは別に機会に論じたい。

が正確に捉えられなかったと考える。

3. 問題提起——時枝の一つの重要な「飛躍」

時枝の初期の論文を注意深く調査すると、実は時枝自身の論じるところの「ノエシス・ノエマ」と「詞・辞」のかかわりが二次的な問題のように見えてくるのである（時枝 1968a, 23 項; 1968b, 70-71 項）。だが、本論では前節で指摘した時枝・フッサール関係に関する諸問題をひとまず脇において⁹、先行研究でノエシス・ノエマの受容が明かに見えるとされた個所（「言語に於ける場面の制約について」1938a）に焦点を当て、現実とその個所こそが時枝がフッサールからもっとも隔たる点であることを明らかにすることを目指す。そして、フッサールとのその隔たりが先行研究で論及されたような誤解（つまり時枝はノエシス＝辞、ノエマ＝詞としたこと¹⁰）にあたるのではなく、実はより大きな理論的「飛躍」であることに注目したい。時枝は言語過程説の一つの足場である言語の存在条件についての理論を打ち立てた時に、フッサールから学んだ「志向性」という概念に特異な意味を加えることによって、つまり「志向性」概念を変形することによって、むしろ自らの言語理論に新たな次元をひらくことができたと理解する。

4. 志向性——ブレンターノからフッサールへ

時枝が「志向性」概念をいかに変形させたかを理解するために、まずフッサール、または現代哲学における「志向性」の意味を説明することが必要である。

周知のように、志向性という概念を中世哲学から取り戻し、現代哲学の用語としたのは、フッサールの師であったフランズ・ブレンターノ（Franz Brentano, 1838–1917 年）である。ブレンターノは 1874 年に心的現象が物的現象からいかに区別できるかという問題を解決するために、志向性をその区別の基準とし、志向性の古典的な定義を行った。つまり、

⁹ 筆者は現在その諸問題についての考察を博士課程の研究の中で行っている。

¹⁰ 詞・辞区別にはフッサールの哲学の影響が明かだが、その影響を理解するために、山内が行う『イデー』の『論理学研究』的捉え方を考慮しながら、時枝がさらに広く参考としているフッサールの理論を検討しなければならない。筆者は別の論文において詞・辞の理論的な背景について詳細に論じるつもりである。

表象においては何ものかが表象される、判断においては何ものかが肯定され、あるいは否定される、愛においては何ものかが愛され、憎しみにおいては何ものかが憎まれる、欲望においては何ものかが欲される。

(Brentano1924:124 項)

換言すれば、ブレンターノにとって意識的現象を特徴づけるのは、意識が的を狙う矢のように、常に「何ものか」を目指しており、「何ものか」の方向に向かって、その「何ものか」(志向的对象)に対しての関係(志向的關係)であるということである。

ブレンターノの弟子のフッサールは志向性を精密な哲学的考察の対象とした。『論理学研究』での志向作用についての理論が言語過程説に対して大きな影響を与えているが、本論の課題である時枝による「志向性」概念の変形は、『イデー』¹¹における「ノエマ的核」と「ノエマ的意味から出発している。当然のことながら、ここでは『イデー』における志向性に関して深く論述することができないが、時枝の「志向性」という語の使い方を吟味する上で必要であるため、時枝の出発点であったノエマ的核とノエマ的意味というのはいかなることなのかを、図式的に要約しておきたい。

『イデー』はフッサールのいわゆる「超越論的観念主義」の基礎が置かれるところであり、純粹経験の本質を記述することを試みる哲学的研究である。それを目標として、世界の實在に括弧をつけることによって、意識の観念的・本質的構造が、そして意識が自らを超越する客体性(Gegenständlichkeiten)をどう構成するかが考察される。世界の實在に括弧をつけ、それを還元した上でフッサールは志向性、つまり意識は常に「何ものか」についての意識であるという事実を説明するために、志向的对象が意識に内在していることを主張した。その対象をノエマと名づけ、それを目指す志向性をノエシスと称した (§87-95)。意識に内在している観念的ノエマは経験(=志向的経験)を規定し、制約している。フッサールの周到な記述は、ノエマにおいて二つの層(Schicht)を区別する (§128-132)。その一つは、ノエマをある同一の対象と結べるノエマ的核(Noematische Kern)であり、他はその対象がどのように現れるのかを規定するノエマ的意味(Noematische Sinn)である。

¹¹ *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie* (1913).

5. 山内得立の「捕捉される客体」・「志向的客体」

山内は『叙説』の第六章の第二節（「意識のノエシス・ノエマ的構造」）において、ノエマ的核とノエマ的意味について以下のように論じる。

茲に於て人は志向的客體（Intentionale ^マObjekt）と捕捉せられたる客體（erfasste ^マObjekt）とを區別することの必要に迫られる。（中略）例へば同一の花を或時は赤いといひ次に美しいといつてもそこに捕捉された客體は同一であるが、志向された客體は前には赤い花であり次には美しい花であつて決して同一であることができない。（中略）全きノエマ（volle ^マNoema）に於て我々は志向的志向的客體と捕捉せられたる客體とを二つの象面（Schicht）として明別する。さうして前者をノエマ的意味（noematische ^マSinn）と名づけ、後者をノエマ的核（noematische ^マKern）と呼ぶ。（山内 1929:321-323 項）

山内はノエマの核と意味の区別を説く上で、『イデー』の中でフッサールがノエマという概念を提起する個所より以前の記述を用いるため、上記の説明が混乱に導くと言わなければならない¹²。しかし、時枝はこの個所を読んでいる時にノエマ的核とノエマ的意味の間の現象学的区別について関心を示すというより、むしろその区別に新たな意味を付与することによって、彼の言語理論の中での大きな問題の解決を目指しているのである。

6. 志向的対象としての聞き手

従来の研究では、よく話し手と聞き手を同等なレベルに置くソシュールの伝達論との違いが引き合いに出され、時枝が言語における聞き手の立場に対して消極的であることが指摘されている（揚妻 2000:17-19 項， 安田 2000:378-379 項， 吉田 2011: 20-21 項）¹³。問題は、時枝に対するそれらの批判が

¹² 『イデー』の構造は漸進的な進行の形式を取っている。『イデー』では「erfasste Objekt」と「intentionale objekt」の間の区別が前半の§37に扱われている。しかしながら、山内は『イデー』の後半で提起されるノエマについて説く際に、前半の個所を使っている。そのため、説明がきわめて不正確になっている。

¹³ その見解は古くから主張されているが、本論の文献はなるべくフッサール・時枝関係を取り扱う研究にかぎることとした。揚妻の引用する、言語学者森重敏の意見がこの時枝の言語理論についてのイメージに関して暗示的である。すなわち、「時枝における聞き手は、いわば人形であつて人間ではない」（揚妻 2000:21）。

言語過程説において言語の存在条件を図式化する以下の三角形¹⁴を、伝達論として取り扱うことによって生じる。



しかしながら、時枝の三角形は言語作用の存在条件についての図であり、伝達についてのモデルではないことを忘れてはいけない。実際、時枝はコミュニケーションを別の図で説明しており（時枝 1937:29 項, 1941:91 項）¹⁵、その図ではソシュールと同様に話し手（遂行者）と聞き手（受容者）が同等な立場におかれている。とにかくも、言語過程説が主体的作用としての言語についての理論であるため¹⁶、コミュニケーションの同等な相手としての聞き手にあまり注目していないのは確かである。時枝自身は以下のように言う。

私の意味する場面は、（中略）受容者としての聴手でなく、言語的主體ある話手に對立するものとしての聴手である。即ち主體の志向的對象となる處の聴手であつて、客觀的に見られた聴手ではないのである。故に若し聴手に於ける言語經驗を對象として考察する場合には、もはや聴手は聴手として存在してゐるのでなく、言語經驗の主體と變ずるのである〔る〕。（時枝 1941:48 項 引用文中の強調は引用者による）

時枝の「志向的對象となる處の聴手」という表現を一見して読み取ると、確かに聞き手が言語主体の受動的な対象にすぎないとする従来の見解を認めなければならない。しかし、その表現の意味を注意深く検討してみると、時枝の使う「志向的對象」という表現は独特な意味を持っていることが分る。

7. 素材的志向性・場面的志向性

本論の対象である言語過程説の成立期において、時枝は言語の存在条件について主に三つの著作において触れている（時枝 1938a, 1941a, 1941b）。聞き

¹⁴ 本論文が対象とする時期の著作・論文において、時枝は「言語の存在条件」を示す三角形の図式を 1938b:76 頁, 1941a:14, 1941b:41, 424, 487 で用いている。

¹⁵ 時枝の伝達論は、19世紀に蓄えられた失語症に関する知識を基にして、言語機能のモデル化であるリヒトハイムの有名な理論の、コミュニケーションの場に適応したモデルである（Lichtheim 1884 を参照）。その適応のための手助けとして、時枝はソシュールの伝達論、そしてコミュニケーションに関するフッサールの論述（山内 1929:215-218, 『論理学研究』の I §7）を参照することができた。

¹⁶ 作用としての言語は、ブレンターノの弟子らと同時の言語哲学において非常に重要な次元である——時枝の言語理論も主にその次元での考察である。フッサールと言語作用についての当時のきわめて興味深い論述のために、Bühler2011 を参照。

手に関する「志向的対象」という名称がその全てに使用されるが、表現の由来が明確に現れるのは時枝（1938a）の中である。そこでは、時枝にとって、主体とともに言語の三つの存在条件である「素材」と「場面」は正に山内の「捕捉された客体」・「志向的客体」の区別から由来していることが分る。まず、山内の花の例を使う時枝の以下の個所を引用しよう。

赤い花と表現する時、かゝる表現の素材は、我々が現實に見る花即ち志向された客體そのまゝではない。（中略）表現の素材たるが為には、それが一度捕捉されることが必要である。志向的對象に對して、素材的對象は、これを捕捉された客體(erfasste Objekt)と云ふことができるであらう（山内得立氏現象学序説三二一頁）。（中略）かく見て來るならば、表現に於いては、二の異なつた客體に對して、それに相應する二の志向關係が同時に働くことを認めることが出来る。一は表現の素材に對して働く志向と、他は表現の行はれる場面に働く志向である。

ここまでは、時枝は山内によるフッサールのノエマ的核とノエマ的意味についての説明に忠実に従っている。しかし、その後の記述には山内の論述、さらにはフッサールの論述に對しての大きな飛躍が目立つ。

例へば、狼に出会つたことを少年少女の前に物語らうとする時、私が狼に對して持つた判断感情想像は素材に對する志向であり、私が話相手である少年少女に對して持つ親しみの感情は場面に對する志向である。素材に關する、素材に對する志向關係は、場面に對する志向關係の素地、軌道の上に表現せられるのであつて、こゝに両者は相關々係が問題にされることになるのである（時枝 1938a: 8 項 引用文中の強調は引用者による）

図式的に表現すれば、時枝は「捕捉された客体」＝「素材」（厳密に言えば言語表現の志向的対象——時枝の例では、オオカミ）、そして「志向的客体」＝「場面」¹⁷（話し相手である少年少女）という等式により、「二つの志向關係」¹⁸があることを述べ、「志向性」に新たな意味を与えるのである¹⁹。

¹⁷ 「場面」は、聞き手を超えてさらに広い範囲の概念を表わしている。筆者は場面に三つの次元があると考え。すなわち、①「場」としての場面、②聞き手としての場面、③制約としての場面である。詳細は別の機会にゆずる。

¹⁸ 「二つの志向關係」という表現は時枝の発想ではない。時枝が引用している山内の個所にも、山内が使用している『イデー』の個所にもこの表現が現れるが、とりわけフッサールの場合 (§37) は、論述の便宜のためだけに使われている。『イデー』の記述を最後まで読むことによって分るように、フッサールは厳密な意味で「二つの志向關係」があると主張していない。フッサールのより明確な論述は、§129 を参照。他方、山内の取り扱うフッサールの著作の中で聞き手との關係を表わすために「志向的關係」という

つまり、時枝にとって、「志向対象」はノエマでもなく、ノエマ的核でもない。言語過程説では「志向性」が二本の線に分岐しており、その一本の線は事物・表象・概念を狙う、通常志向性と言われる関係を示す。ただし、時枝はその関係について「志向性」という語を使うことを避けている（普段は素材・素材的对象と呼んでいる）。時枝の言う「志向性」のもう一本の線は主体と世界の関係にかかわっておらず、実のところは言語の相手である聞き手に向かう関係である。その関係はむしろ事物などへの指示（reference）の関係ではなく、主体とそれに対立する聞き手の間の関係のことを表現している。

時枝は言語の中での事物・表象・概念を「素材」との関係の中に配置し、「場面」に「誰にいふか」という言語作用の側面を背負う役割を与えているのである。彼が言うように、「言語の実践に於て、「誰にいふか」といふことを考へることは、「誰がいふか」を考へると同様に重要なことである」（1941a:7 項）。第6節に引用した文を繰り返して読むと、

私の意味する場面は、（中略）受容者としての聴手でなく、言語的主體である話手に對立するものとしての聴手である。即ち主體の志向的對象となる處の聴手であつて、客觀的に見られた聴手ではないのである。（時枝 1941b:48 項 引用文中の強調は引用者による）

こうして時枝が求めているのは、話し手と同等なレベルに立つ伝達論的な聞き手ではなく、彼にとって言語作用の存在条件に欠かすことができない、「誰にいうか」という次元を取り扱う上での理論的な装置なのである。言語理論家としての時枝は、「言語の本質は何か」という問いに答えようとする時に、彼の実践的な研究の対象である日本語から学んでいるのは、言語が言語主体と対象という二項対立だけで解明できないということである。

「あの方はおいでになる」

「あの方はおいでになられます」（時枝 1941a:8 項 下線は原文）

時枝が挙げる上記の例文に見られるように、言語には、主体と対象が同じであっても、主体と聞き手の間の相対的關係により、表現が異なることがある。日本語のように聞き手の位置に対する敏感なことは、言語が主体・対象という二項変数の関数でなく、三項変数の関数であることを明かにしている。時枝

概念が用いられているのは恐らく一カ所（『論理学研究』「第六研究」§69）においてだけであるが、そのフッサールの論述は『叙説』で反映されていない。

¹⁹ 山内が取り扱うフッサールの著作の中で、聞き手との関係を表わすために「志向性」という概念が用いられるのは恐らく一カ所（『論理学研究』「第六研究」§69）においてだけである。

は言語作用を主体・対象関係に還元できないことを理解し、その主体と聞き手（場面）の間の関係を「場面的志向性」と名づけた。そうして、主体と主体の間の水平の関係でない、話し手と聞き手の位置によって異なる相対的な関係を概念化することができたのである。

以上のことから、山内の論述に関する誤解であったとしても、意図的な意味の変更であったとしても、時枝はフッサールの「志向性」概念を変形することにより、言語過程説は以前の言語理論が取り扱えなかった新たな領域に立ち入ることを可能としたと理解することができる²⁰。

おわりに

本論は言語過程説において時枝がフッサールから学んだ「志向性」という概念がいかなる意味を持っているかを明かにすることを目的とした。そのために、ブレンターノによる「志向性」についての古典的定義を検討し、時枝の「志向性」についての概念の変形の出発点であるフッサールが『イデー』で提起するノエシス・ノエマ、そしてノエマ的核・ノエマ的意味という概念を説明した。次に、時枝の「志向性」に関する独特な捉え方がノエマ的核とノエマ的意味についての山内の記述から由来していることを証明し、言語過程説の存在条件である「素材」と「場面」の成立において変形されたその「志向性」概念がどのように関与したかを明かにした。

時枝の言語理論におけるフッサールの哲学の影響を研究するためには、言語過程説とフッサール・山内の間の関係についての徹底的検討、そして当時代にきわめて有力であった、フッサールを含めるブレンターノ以降のドイツ語圏の言語哲学に併せて言語過程説を考察することが必要である。その広範囲な研究の第一歩として、本論は従来の研究が把握しなかった、時枝の「志向性」という概念の実際の意味とその理論的経緯を解明することを試みた。

²⁰ 時枝の以前にビューラーも言語の本質を話し手・聞き手・事物の三角形で説明しているが、ビューラーでの話し手・聞き手の間の関係（*Kundgabe, Appell*）は、時枝の言う「場面的志向性」と異なる。田中慎（Tanaka 2011）を参照）は、また田中を参照している Werner Abraham（2011）も、ビューラーと時枝の間の極めて興味深い比較をしているが、時枝の三角形のこの一辺（話し手と聞き手（場面）の関係）について論じていない。これについては、筆者は他の機会で論じたい。

参考文献

- Abraham, Werner, 2011, “Traces of Bühler’s Semiotic Legacy in Modern Linguistics”, in Bühler2011, pp. xiii-xxvii.
- Bühler, Karl, 2011(1934), “Theory of Language. The representational function of language”, John Benjamins, Amsterdam&Philadelphia.
- Brentano, Franz, 1924(1874), “Psychologie vom empirischen Standpunkt”, Meiner, Leipzig.
- Husserl, Edmund, 1913, “Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie”, Max Niemeyer, The Hague.
- Karatani, Kojin, 1995. “Nationalism and écriture”, Surfaces, vol 5(201), pp. 1-25.
- Larm, Lars. 2008. “Early uses of the term chinjutsu”, Lund University Dept. of Linguistics Working Papers, vol. 53, pp. 97-115.
- Lichtheim, Ludwig, “Über Aphasie”, Deutscher Archiv. Für Klinische Medizin, vol. 36, pp. 204-268.
- Tanaka, Shin, 2011, “Deixis und Anaphorik. Referenzstrategien in Text”, Satz und Wort, De Gruyter, Berlin&Boston.
- 揚妻祐樹, 2000, 「二元論者としての時枝誠記」『国語学研究』39号, 12-22頁.
- 今井亮仁, 2002, 「時枝誠記の国語教育論——現象学的「主体」論から」『第23回国語教育論史学会（早稲田大学）』未刊行.
- 川崎誠, 2001, 「文法の研究について」『人文科学年報（専修大学人文科学研究所）』31号, 91-111頁.
- 釘貫亨, 2010, 「時枝誠記「過程説」と有坂秀世「音韻論」をつなぐ現象学の系譜」(『日本語学最前線』和泉書院、701-715)
- 高木市之介, 1972, 「時枝さんの思出」『国文学解釈と教材の研究』17(4)号, 212-216頁.
- 高橋里美, 1931, 『フッサルの現象学』第一書房
- 時枝誠記, 1937, 「心的過程としての言語本質観 I-II」『文学』5(5)号, 1-30頁; 5(7)号, 1-20頁
- 1938a, 「言語に於ける場面の制約について」『国語と国文学』15(5)号, 1-12頁

1938b, 「場面と敬辞法との機能的関係について」『国語と国文学』15(6)号, 65-85 頁

1941a, 「言語の存在条件——主体・場面・素材——」『文学』9(上)号, 1-14 頁

1941b, 『国語学原論——言語過程説の成立とその展開——』岩波書店.

1968a, 『講座日本語の文法』第一巻、明治書院.

1968b, 『講座日本語の文法』別巻、明治書院.

根来司, 1983, 「時枝誠記博士の国語学——現象学とどうかかわり、どうかかわらないか」『国語と国文学』60(8)号, 45-56 頁.

野村剛史, 1991, 「助動詞とは何か——その批判的再検討——」『国語学』165(6)号, 38-52 頁.

藤井貞和, 2000, 『国文学の誕生』三元社.

安田敏朗, 2000, 「「主体」言語論の陥穽——時枝誠記再論」『近代日本言語史再考——帝国化する「日本語」と「言語問題」』三元社.

吉田雅昭, 2011, 「言語過程説にみる主観・客観問題」『国語学研究』50(3)号, 111-124 頁.

吉本隆明, 1965, 『言語にとって美とはなにか』勁草書房.